昔がたり（三）

あざみ

教授法のけいこでは、隨分先生を困らせた。これは相互に一人づつ先生になつて、級のお友達に生徒になつてもらつたのである。ほんとの先生は後の方で見ていらつしやる。まづ教場で先生ごつこをする樣なものである。男の教生の時にはそれでも眞面目（まじめ）で、「皆さん、この印は樂鍵といひます」、などと云つてゐる。女の時には、黒板の方ばかり向いて何か云つてゐる。先生が「――さん生徒はこちらにゐるのです。生徒の方を向いてものを仰いといふ。こちらをむくとお友達も、おかしさうな顔をしてゐる。たまらなくなつてオルガンの中へ首をちぢめて、いつまでもいつまでもクス〳〵いつてゐる。先生が、「困りますね」といつて、側へ來て無理に皆の方へ向けて立たせると、一齊に笑が破裂して、其日のけいこはお流になる』

試驗は、學期の終毎にきまつてあつた。唱歌や樂器は先生方不殘立合の上である。受持の先生が其學期中にしたものをすつかり、書附にして、立合の先生方に見せると、その先生方が、其場でこれとこれと、と云つて問題を出す。其れ故一學期間に習つたものは、どれもこれも、さらはなければならないので際分なさはぎであつた』

ふだんは實になまけて、殊に夏などは、練習がいやなのでおはじき斗してあそんでゐた。運動場から椿の實を拾つて來て、四十六室へ通ふ「たたき」の所でよく始めた。外國先生が時時これを見て、自分も仲間入りをしようといふ。それではといつて入れてあげる。と、やたらにいくつでもはじいて、皆取つてしまう。「先生、いけません、それはおやつといつて禁じられてゐるのです」。といふ。先生は、はじいてとるのだ

と初めにをしへたではないか。といつてどうしてもきかない。それから二つだけになつた時は、お高蒔きをするのです、といふと先生は、窮屈さうに、肘を下につけてお高蒔きをする、おはじきは、こちらの方がうは手であるから、先生は、ぢきに身代限りをする。ときまつて先生は「さ、もうよい加減に練習においで」、といふ。「だつて、だつて——といつても、あとから何もいふ事が出て來ないので、肩揚げの所をひつぱられて、練習室へ入れられてしまう。しかたがないので、泣きさうな顔をして、一ト二ト三ト四トとはじめる』

其頃、毎日一番おしまいの時間は、コーラスときまつてゐた。朝からコツコツ學科に苦しられたあと、一室にあつまつて大きな聲を出すと、よい心持になるので、皆で樂しみにして四十六室へ出かけた。人数はせいぜい二十人位であつたと思ふ。よく各部から一人づつ立たせられて、クワルテツトを唱はせられる。出來ないと帳面をとりあげられて驢馬の首などかかれる。あんまり出來ないと、Go and Practice.といふ一喝のもとに室外へ出される。そしてよい加減さらつた時分にまた呼びかへされて唱はされる。ある時先生が例のとほり、ある人の帳面をとりあげて、何かかうとして急に笑ひ出した。そして皆の方を向いて、「誰かマルサ、サラングイラ」、といふ言葉を知つてゐるかときく。誰もしりませんと答へる。先生は、「モルト、トランクイロ」といふのではないかと笑つた。そのおかげでその人はひとつ驢馬の首がたすかつた』。

それから又先のハイカラの反動でもあるまいが、洋服はさておき、髪まで日本風に結ふ樣になつた。音樂會などといふと、「しまだ」の振袖姿でヰオリンなどをひく人がある。それとこれとは關係のあるわけでもあるまいが、前にいつたトケミハから、日本のヒフミヨに変つた。これで半音階を上行すると、たしか、ヒトフタミヨヤイツムユナヒといひ、下行すると、ヒナネム何とかいふのである。それで又皆で、イヤナヒトだの、ネムイヤイだのといふ音程をこしらへて、喜んでゐた』

だんだん進んできて、學友會といふものが出來、年に二度演奏會を開く事となつた。皆もおひおひものがわかつてきた

ので、始の様にめくら滅法でなく、少しはせいを出してさらふ様になつた。會が近づくと、先生もよくおそくまで殘つて皆をさらつて下さつた。先生は、「どうしてさう出來ないかといつてためいきをつく。生徒は、「どうしてこう出來ないかといつて涙をこぼす。一人づつ先生とさしむかひでよく教へられた。――これを思ふと今猶申譯のない気がする。――其頃は今とちがつて譜は皆うつさなければいけなかつたので、まちがつてゐるといけないといつて、先生は皆の譜を一々檢閲した。そして舞臺へ持つて出る譜はチャンとよそゆきとして、きれいな色絲でとぢたりして持つてゐた。會がすむといつでも先生は、ニコニコしてほめたりはげましたりして下さつた』

三大節の式には、先生方の拜のあとで私共も一人一人拜をした。其前日に下げいこがある。其時何とやらいふ人のおじぎのしかたが丁寧でないといつて、先生がそばへ行つて、そんな事ではいけない、こうしてとか何とかいつて其人の肩へ手をかけると、其人がヒョロ〳〵と二三間あちらへ、けしとんでヘタ〳〵と坐つてしまつた。私共はをかしさはをかしいけれど、笑へば叱られるから、苦しがつて下を向いてゐた』

【入力者注】底本と行を合せるために、フォントのサイズを変更したり半角スペースを挿入した箇所があります。

底本：東京音樂學校學友會「音樂」第二巻第八号
明治四十四(1911)年八月十日発行
筆名：あざみ
入力：小林　徹
公開：令和四(2022)年十一月四日

橘糸重【散文作品集】に戻る。